

「徳一と最澄」～徳一が学んだ唯識思想。そして最澄との論争～

師 茂樹（花園大学）

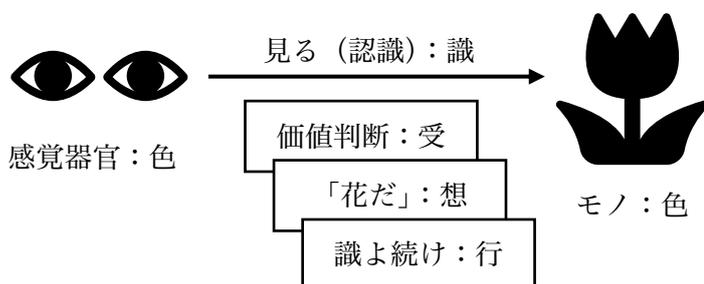
徳一

- 徳一がどのような人物だったかについては、残念ながら限られた資料しか残されていない（『最澄と徳一』1～10 ページ）。
- 徳一は、**法相宗**の僧侶だった。
  - 「奥州会津県の溢和上は、**法相**の鏡に執し、**八識**の面に鑑み、**唯識**の炬を挙げて、**六境**の闇を照らす。たちまち『中辺義鏡』三巻を造り、盛んに天台法華義を破す。」（最澄『守護国界章』、『最澄と徳一』82～85 ページ）
- 「法相」「八識」「唯識」「六境」って何だろう？

初期仏教から唯識思想へ

初期仏教～

- **法（ダルマ）**の集合体として人間、世界を捉える。法（ダルマ）の性質や特徴（法相）の分析は、仏教研究の主流となる。
  - **五蘊**（五つの集まり）：色・受・想・行・識



【図1】

- **十二処**（十二の場）

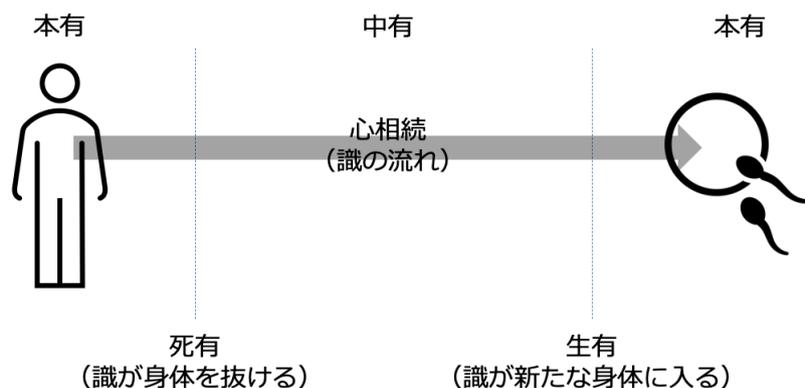
六根（六つの器官）	六境（六つの対象）
眼	色（いろ・かたち）
耳	声（音声）
鼻	香（におい）
舌	味
身	触（触覚・体内感覚）
意（こころ）	法（考えられるもの）

- **十八界**（十八の領域）

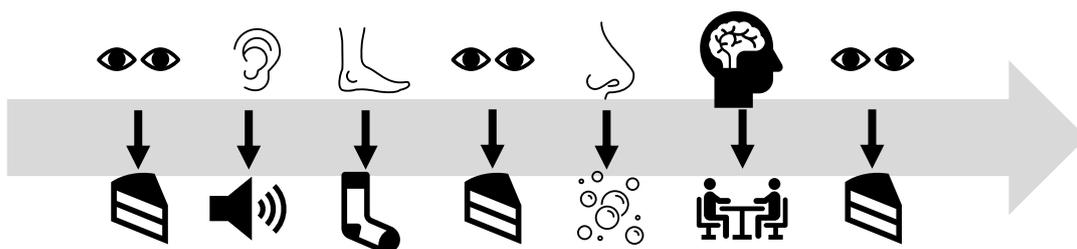
六根（六つの器官）	六境（六つの対象）	六識（六つの認識）
眼根	色境（いろ・かたち）	眼識（見る）
耳根	声境（音声）	耳識（聞く）
鼻根	香境（におい）	鼻識（におう）

舌根	味境	舌識 (味わう)
身根	触境 (触覚・体内感覚)	身識 (体で感じる)
意根	法境 (考えられるもの)	意識 (思う、考える)

- この三つが世界にあるものすべて (一切法)。瞑想による心身の観察が修行の中心であった仏教では、修行者が見たり感じたりするものとして世界や人間を説明しようとする。法 (ダルマ) の分類・分析も、人間の認識を離れた世界があるかどうかは別にして、客観的なものとして考えるのではなく、(あえて言えば) 主観的に考える。
- ただし人間は、これらの法 (ダルマ) が寄せ集まったものにすぎないので、厳密に言えば主観はない。「諸法無我」とは、この法 (ダルマ) のどれも我 (アートマン、魂のようなもの) ではない、ということ。こういった法 (ダルマ) が集まることで生き物ができると、後から「私」(仮我) が立ち上がってくる。先に「私」(我) があるのではない。
- 逆に言えば、こういった法 (ダルマ) は実在する、と考える。初期仏教以来の教団を継承する主流派 (部派) の説一切有部は、「すべての法 (ダルマ) は実在すると説く人々」というグループ名。
- ちなみに、輪廻転生も識の出入りによって説明される。



識の流れ:

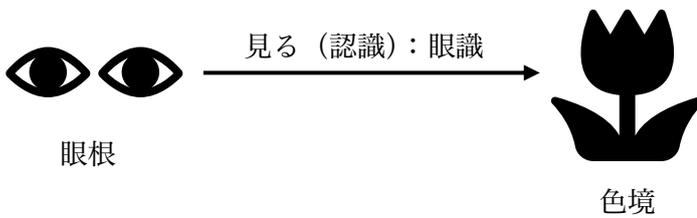


### 大乘仏教～

- 空：法 (ダルマ) は、ほかのものに依存して生じ、変化し、消滅するので、固定的な実体はない (無自性)。
  - 「観自在菩薩照見五蘊皆空……色不異空、空不異色。色即是空、空即是色、受想行識亦復如是」 (『般若心経』)
  - 「観自在菩薩は、五蘊はすべて空であると見た。……感覚器官やモノ (色) は空と異ならず (同じであり)、空は感覚器官やモノと異なる。感覚器官やモノ (色) には固定的な実体がなく (空であり)、固定的な実体がないものが感覚器官やモノ (色) である。価値判断 (受)、「花だ」と言

葉でとらえること（想）、識を継続させる力（行）、認識（識）もまた同様である。」

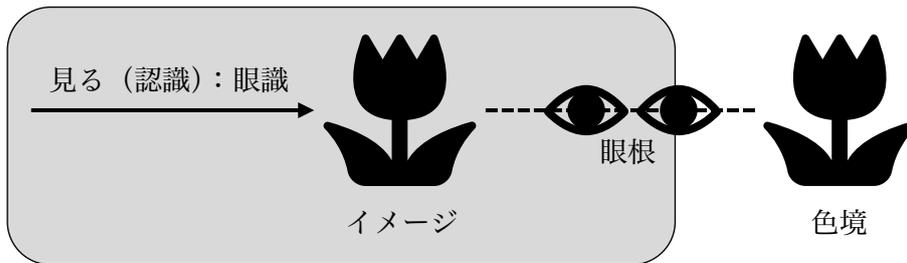
- この世界にあるすべての法（ダルマ）は空であるとするならば、どうやって世界や人間は成り立っているのだろうか？
- **唯識**：識という法（ダルマ）だけがあれば、世界や人間の成り立ちは説明できると考え、識を中心とした、新たな法（ダルマ）の分類、分析（法相）が行われるようになる。
  - 素朴な考え方：私たちは外にあるものを直接見ている。



【図2】

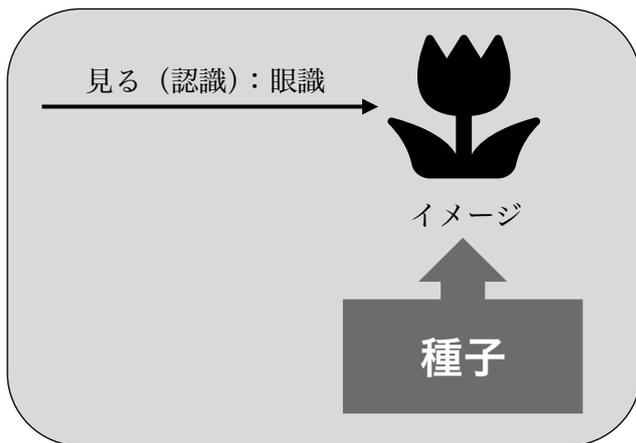
疑問：外にあるものを、そのまま、いつも変わらずに見ているのか？ 夢で何かを見ているときは、なぜ見えるのか？

- 解決策：モノを見るときには、識が心のなかにイメージを作って、それを見ている。



【図3】

- 展開：夢でモノを見ているときのように、外にモノがなくても**記憶（種子）**さえあれば識がイメージを作り出せるのであれば、識だけで世界が説明できるのでは？



【図4】

- 唯識で考える十八界（十八の領域）

器官	認識対象＝外界	八識（八つの認識）
眼根	（阿頼耶識の作り出した）色境	眼識
耳根	（阿頼耶識の作り出した）声境	耳識
鼻根	（阿頼耶識の作り出した）香境	鼻識

舌根	(阿頼耶識の作り出した) 味境	舌識
身根	(阿頼耶識の作り出した) 触境	身識
意根	法境	意識
×	阿頼耶識	末那識 (阿頼耶識を見て「これが私だ」と思い込む)
×	自分が作り出した六根・六境	阿頼耶識 (すべての種子を蓄え、自分と世界を思い浮かべる)

- 徳一はこのような思想を学び、おそらくは会津で伝えていた(『最澄と徳一』11~12ページ)。しかし、最澄・徳一論争のなかでは、瞑想に関する論争を除き、ほとんど議論されることはない。

- 唯識思想の伝来

- インド：釈迦／弥勒 → 無著・世親 …→ 護法 → 戒賢 → 玄奘
- 中国：玄奘 → 基 (窺基) → 慧沼 → 智周
- 日本：玄奘 → 道昭、智周 → 玄昉など …→ 徳一



### 唯識思想が考える成仏の可能性

- 種子はあらゆる認識 (=行動)、思考の原因となるもの。人が仏教の修行者となり、その結果(ブツダになる、など)を得るのも種子があるから。逆に、種子がなければ、ブツダなることなどもできない。
- 唯識思想ができたころ、仏教の修行者とそのゴールは、おおむね三つのタイプがあると考えられていた(三乗説、『最澄と徳一』i~vii)。
  - 仏教教団のなかで修行をする**声聞**が、**阿羅漢**になり、輪廻から脱出(解脱)する。
  - 仏教教団とは違うところで、独自に修行をする**独覚**が、**阿羅漢**になり、輪廻から脱出(解脱)する。
  - ブツダになることを目指して修行をする**菩薩**が、**ブツダ**になる。
- この三つのゴールについては、様々な考え方があった。
  - 釈迦は、弟子たちに阿羅漢になる方法を教えた。初期仏教以来の伝統を受け継ぐ主流派の仏教教団(部派)は、一般修行者のゴールは阿羅漢であり、ブツダはごくまれにしか誕生しないと考えていた。たとえば、釈迦仏のあとに出てくるブツダは、56億7千万年後の弥勒仏とされる。菩薩というのは、修行時代の釈迦を指すことが多かった。
  - 大乘仏教は、ブツダになることをゴールに設定し、自らを菩薩であると主張した。阿羅漢をゴールにする主流派(部派)の人々を「小乗」と貶めた。→ 唯識派はこの考え方(おそらくはインド大乘仏教の主流)。ブツダになることがすぐれているとは考えるが、阿羅漢になることも否定しない。徳一の立場。

- ◻ さらに、大乘仏教の一部の集団は、すべての人々がブツダになると主張した。『法華経』は、阿羅漢になる教えは「方便」だと主張し、声聞・独覚も菩薩であると主張した（**一乗説**）。『涅槃経』は「一切衆生悉有仏性」を説き、生きとし生けるものにはブツダになる素質（仏性）があると考えた。→ 東アジアではこちらが主流となる。最澄の立場。
- 唯識派は、三種類の修行者がいるのであれば、その原因となる種子（本有無漏種子）があるはずだと考えた。法相宗では、その有無によって次の5タイプにまとめた（五姓各別説）。
  - ◻ **声聞種姓**：声聞になるための種子を持っているので、阿羅漢になれる。
  - ◻ **独覚種姓**：独覚になるための種子を持っているので、阿羅漢になれる。
  - ◻ **菩薩種姓**：菩薩になるための種子を持っているので、ブツダになれる。
  - ◻ **不定性**：声聞・独覚・菩薩になるための種子を複数種類持っており、何になるかが確定していない。
  - ◻ **無種姓**：どの種子も持っていないので、阿羅漢になることもブツダになることもできない（永遠に輪廻を続ける）。
- 様々なタイプ、ゴールを認める唯識派の人々は、「菩薩」として社会活動を行った（→ 高次喜勝師の講演）。
- 東アジアでは「すべての人々がブツダになる」という考え方が主流であったため、五姓各別説が説かれた唯識派の文献を玄奘が翻訳して紹介すると、大きな反発と論争がおきた。最澄・徳一論争は、そのうちの一つ（**三一権実論争**）。
  - ◻ 唯識派・法相宗：『法華経』の一乗説（すべての人はブツダになる、という説）は不定性のために説かれた仮（権）の教え。世親はそのように解釈しており、玄奘もインドからこの考え方を伝えた。真実（実）は三乗説・五姓各別である（**三乗真実・一乗方便**）。
  - ◻ 法相宗を批判する人々：『法華経』は釈迦の晩年に「三乗説は方便だ」と説いたものであるから、三乗説のほうが仮（権）の教えであり、一乗説のほうが真実（実）である（**一乗真実・三乗方便**）。天台宗を開いた智顛は、前世で『法華経』の聴衆だったので、その説は間違いない。